

令和3年度 印西市民アカデミーだより 第7号

印西の歴史散策6（東国三社詣/香取・鹿島・息栖）

竹袋村の「木下河岸」は、江戸幕府による利根川の改修工事「利根川の東遷」や水運網の整備、木下街道を含む陸上交通の整備が進み、江戸と下利根川(鹿島・銚子方面)を結ぶ交通の要所として、多くの旅人や物資が行きかい繁栄しました。特に、関東以北の人は伊勢に参宮した後、禊の「下参宮巡り」と称して東国三社(香取神宮・鹿島神宮・息栖神社)を参拝するために向かう旅人を乗せた乗合船「木下茶船」の発着場として江戸に名を知られた町場でした。江戸時代中期には、年間1万7千人余りが利用しました。明治時代になると、蒸気船が就航し、年間約3万人が木下に宿泊し大いに賑わいました。今回は、バスの車窓から夏空に映える入道雲を眺めながら利根川沿いを銚子方面に下り、現代版「東国三社詣」(7月24日)を体験しました。

香取神宮と鹿島神宮は、古来深い関係にあり、「香取・鹿島」と並び称される一対の存在です。その真意の背景には、両神宮が軍神として信仰されたことにあります。古代の関東の東部には、香取海という内海が広がっており、両神宮はその入り口に扼する地政学的重要地に鎮座しています。この香取海は、ヤマト政権による蝦夷進出の輸送基地として機能したとみられており、両神宮は、その拠点とされ、両神宮の分霊は朝廷の威を示す神として東北沿岸の各地に祀られました。武家の世になってからも武神として信仰され、源頼朝や徳川将軍家の祈願や寄進が寄せられました。両神宮は、毎年朝廷から勅使として「鹿島使(かしまづかい)」「香取使(かとりづかい)」の派遣があり、極めて異例です。



武甕槌大神

現在は、「東国パワースポット巡り」のコースとして若者たちの人気を博しています。



▲黒漆と金の飾りのコントラストが美しい香取神宮！



▲香取神宮の総門前で記念の一枚、パチリ！



▲鹿島神宮で茅の輪くぐりを体験！ハの字に回って…



▲鹿島神宮の広大な森には、巨樹が生い茂る。



▲息栖河岸から息栖神社の一の鳥居を望む。



▲一の鳥居の左右にある日本三霊泉の一つ「忍潮井」